

松本礼子

おとづれ

夜には

古い手紙を取り出します

紙の色も変わって

これまでに

いくども読み返した

手紙

一語一語に宿る

花の雫が

薄墨色の夜風に吹かれて

時の上葉を

滑り落ちます

いまはどちらに

おいででしょうか

お顔もお声も

いまとなっては

定かなものは何もなく

ただあえかな香りばかりが

しずかにここに

触れてゆきます